

レヴィナスと沈黙

—— ブランショ論を中心に ——

橋 本 典 子

沈黙の世界に消えた一人の哲学者がいた。彼は一九九五年十二月二十五日降誕祭の日パリで八十九歳で永眠した。残された著作は、『全体性と無限 (Totalité et Infini, 1961)』、『存在とは別様に或る』は本質の彼方 (Autrement qu'être ou au-delà de l'essence, 1974)、『困難な自由 (Difficile Liberté, 1974)』、タルムードについての講義等ユダヤ思想に関するもの、そして最晩年の出版書、一九七五年から翌七六年にかけてパリ大学で行なわれた講義録で一九九二年に出版された『神、死と時間 (Dieu, la Mort et le Temps)』等多数である。その哲学者はエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Levinas)。一九〇六年一月十二日リトアニア生まれである。彼の主張は、従来哲学の中で最も重要な第一哲学は形而上学であったのに対して、倫理学を第一哲学として提示し、プラトーンの「存在の彼方に (ἐντεκνέωταις οὐρανός)」善のアイデアが輝く」という『国家』の言葉に注目し、存在を超えた『善』を認めることであった。かかる善の追究は自己と絶対的他者 (Autre) である無限者 (Infini) との関わりの問題として考察された。それは即ち有限者であり現存在である人間がいかにして無限者と関わるのか、という問である。

顔なしの《中性》

レヴィナスはモーリス・ブランショ論で次のような興味深い言葉を語っている。「芸術と文学についてのモーリス・ブランショの反省は最も高いものを求めている。ブランショが最近の書物（『文学的空間（L'espace littéraire）』（1955）でヘルダーリン、マラルメ、カフカ、ルネ・シャールの解釈をしているが、その解釈（interprétation）は最も厳格な批判よりずっと深いところに達している。実際にこの書物は全ての批判と全ての積義（exégèse）の彼方に位置づけられる」と。レヴィナスが「全ての批判と全ての積義の彼方（au-delà）」と言い、「最も高いものを求める（les ambitions les plus hautes）」と言う時に目指されているのは何なのか。更に少し先でレヴィナスは次のように言う。「形而上学を超えているこれらの全ての著作の中で、我々はある服従とある忠誠の高揚に居合わせている。しかしこの服従や忠誠は具体的な誰かへの服従や忠誠ではない。神々の不在はある非決定の現前として働いている。それは決して静かなままではない独一の無である。しかし《無化はしている》、つまりパロールを、しかも本質的なパロールを賦与された沈黙である。顔なしの、ブランショの表現に従えば《姿なしの》中性である。一筋の黒い光が無名の断え間ない、いくつもの渦巻から出ている」この文章の意味は重要である。まず「形而上学を超えている」とは、形而上学（*metaphysica*）が自然学（*physica*）を超えて（*meta*）超えて、後に「存在論（*ontologia*）と神論（*theologia*）を論ずるのに対して、それを再度超える（*dépasser*）、通り過ぎる、凌駕するのである。レヴィナスが「これらの全ての著作」と言っているのは、この文章の前どころから、哲学の領域で《存在の真理（*vérité de l'être*）》に達したが、叡智（*sagesse*）への愛（*l'amour*）を弱めてしまったハイデガーの存在論と、神々は死んだとし或るいはこの世界から退いた、そして現実の具体的な人間はたとえ理性的であっても宇宙を捉ええないとする無神論の著作を示している。いずれにせよ、それらの著作には人間の限界、或るいは西欧的ヒューマニズムの限界が示さ

れている。しかし形而上学を凌駕しようとする著作の中で「ある服従とある忠誠の高揚 (l'exaltation d'une obéissance et d'une fidélité)」に我々は出合っている、と言われる。しかも誰か具体的な人間に対する服従や忠誠ではない。「神々の不在はある非決定の現前として働いている (L'absence des dieux se joue comme une indéterminée présence.)」は極めて重要な文章である。つまり神々が死んだり隠れたりして不在となった神々に代って人間がその役割を果たすというのではない無神論が論ずる神々の不在ということ自体が、非決定の現前、つまり確固とした規定されたものでない何かわからないものの現前として働いている。そしてその次の文章は大切なのでフランス語でも引用しよう。

Singulier néant qui ne reste pas tranquille, mais (néantité), silence doué de parole, et même d'une parole essentielle. Neutre sans visage, (sans figure), selon l'expression de Blanchot, même si une noire lumière émane de leurs anonymes et incessants remous.

かかる何かわからないものの現前とは、独一の(特異な)無(néant)である。それは無といっても物音一つしない静寂なのではない。無は《無化している(néantité)》。そして無化している無はパロール、しかも本質的なパロールを賦与された沈黙である。つまり根源的な語りを担った沈黙である。顔なしの中性、ブランシヨの表現によれば《姿なしの》中性である。つまりレヴィナスにとって顔(visage)は意味作用(signification)であるから、顔なしの中性とは意味作用なしの中性、更には意味作用なしの主体性確立以前の状態である。それはブランシヨにとっては《姿なしの》中性、姿(figure)とは文彩と訳する人もいるように、具体的な現われとしての文章で、それは書き手の個性を担うものであるから、そのような具体的現われのない中性的状態である。一筋の黒い光が無名の断え間ない、い

くつもの渦巻から出ている。顔なしの中性、《姿なしの》中性であるから無名性である。そしてかかる無名の断え間のない渦巻（繰り返し）から一筋の黒い光が出ている。この「黒い光」は不吉なものを予想する。しかしこの無名の断え間ない渦巻（繰り返し）が、最初の言葉「独一の無」であり、そこから出る黒い光こそ本質的なパロールではないのか。

ところで《姿なしの中性》といわれた〈中性 (Neutre)〉とはいかなるものか。我々は少くとも〈中性〉を「無名性 (anonyme) である」と確認した。レヴィナスは「アンドレ・ダルマスとの対話 (Entretien avec André Dalmás)」の中でダルマスが「無名性、ブランシヨが中性と呼んだもの」⁽⁶⁾と言った後で、「この中性は現前するのか、或るいは不在なのか？ 中性は書かれたもの (écriture) に於いて純粹な肯定によって、或るいは否定によって自己を表わすのか」⁽⁴⁾と問われて次のように答える。「この中性、或るいはこの排除された第三者 (排中) は、存在の肯定でも純粹な否定でもない。(Ce Neutre, ou ce Tiers Exclu, n'est ni affirmation ni pure négation de l'être.) なぜならば肯定と否定とはある秩序 (l'Ordre) の中にあり、肯定と否定はその秩序の部分を作っているからである。しかしながらこの中性にこだわり続けることは何かわからない否定的なものを含んでいる。人はそれ (この中性) とかわり合う (frayer) ことはない。それはとりわけ、《おびえさせるもの (恐ろしいぞ) とするもの (l'effrayant) — 関わることから距離をとるようなもの》である。そしてブランシヨの小説になったすべての作品は、この雰囲気、つまり非現実の現実、圧迫されたような不在の現前、「謎の男トマ」(初版) 以来、ブランシヨが我々を導いている死の後の雰囲気のようなものの中で漂っている。(Et toute l'œuvre romancée de Blanchot baigne dans cette atmosphère d'une réalité de l'irréel, d'une présence de l'absence qui est pesante, comme l'atmosphère d'après la mort, où dès *Thomas l'Obscur* (dans sa première version), Blanchot nous introduit.) 恐ろしく、この中性の曖昧性は、ある部屋や廊下を横切ることの出来ない登場人物たちのくぎづけになった動きが取り戻す、突然の生き生きとした状

態と余裕の中で現われる」と。⁽⁵⁾つまり中性 (Neutre) とは何らかの《否定的なもの》を含み、人間がかかり合うことのない《恐ろしい、ぞっとするようなもの》である。それはそこにおいてブランシヨの小説が漂う雰囲気なのであり、即ち《非現実の現実性 (une réalité de l'irréel)》《不在の現前 (une présence de l'absence)》《死後の雰囲気 (l'atmosphère d'après la mort)》である。しかしその《中性》の曖昧性は突然の生き生きとした状態で終わる。レヴィナスは更に「匿名の終わりのなきさざめき」が、文学空間を満たす歌で終わる。⁽⁶⁾と語り、また「終わりのなきさざめきのなかでは言語は肯定であり否定である」⁽⁷⁾が「しかし物語は歓喜、丁度勝利の如き歓喜のページで終る」⁽⁸⁾と語る。つまり、「匿名の終わりのなきさざめき」「ためらい」とは「言語が肯定であり否定である」こと、それこそまさに《非現実の現実性》《不在の現前》である。そしてその文学空間は突然最後に生き生きとした状態、つまり歌、歓喜で終わる、というのである。

ブランシヨはニーチェのニヒリズムを論じて、「端的で根本的な言述で」また「時として不確かな、ためらいがちに接近、つまり思惟の不可能な形」でニーチェは述べている、とする。ブランシヨによれば、ニーチェの言述は、「超えられ得ない極限に立っているが、しかしそれこそまさに超えていく唯一の道である。それは新しい始まりの原理である。(it is the principle of a new beginning)」と語られ、ブランシヨはニヒリズムの超越、超人へ向けての人間の克服が新しい時代の課題であり原理であることを明確にしている。つまりブランシヨはニーチェのニヒリズム論でもその《中性》の曖昧性を見、そこからの超越の道を探っている。しかし彼は「ニヒリズムは存在と結びついている。……ニヒリズムは我々に我々が無について考える時、我々がまだ存在について考えていることを語っている」⁽¹⁰⁾と述べ、ニヒリズムの不可能性⁽⁹⁾を示す。無 (nothingness) は存在のレヴェルでの思考であって、その意味でニヒリズムは不可能であるとする考えは重要である。

レヴィナスは明らかにフランソワーズ・コラン (Françoise Collin) のブランシヨ論を評価する。⁽¹¹⁾コランは『謎の

男トマ (Thomas l'Obscur)』の言葉「我思う故に我在らず (Je pense, donc je ne suis pas)」を引用して「我語る故に我在らず (Je parle, donc je ne suis pas)」と理解できるとする。これは、デカルト以来の認識論、そしてその基礎となる自我の存在の哲学の第一原理に対する挑戦である。即ち文学に於いて我が語っても我は存在せず、何かあるものが語るのである。つまり作家としての我は沈黙し、そこに漂うのは死後の雰囲気だけである。レヴィナスはコランがたびたび言及する《死後 (Après la mort)》の雰囲気について語る際、彼は自己の立場をハイデガーと対立するものとする。

「《存在に関して》死後の距離は単なる否定によつては獲得されない。ブランシヨの中性は世界にとって異質である (Le Neutre de Blanchot est étranger au monde)。——全ゆる異質性の彼方の異質性 (une étrangeté au-delà de toute étrangeté) である。私が表現出来るとするならば、ある《提示者 (exposant)》を伴っている。いかなる神からもずいぶん遠い (Plus loin qu'aucun Dieu)。⁽¹⁷⁾」即ち死後とは《存在に関して》その単なる否定ではない。つまり存在の否定の無とは異なる。従つてブランシヨの《中性 (Neutre)》はこの現実の世界にとって異質 (étranger、よその、未知の) である。しかし《中性》とは全ゆる異質性の彼方の、異質性の次元を越えた極めて特異な異質性である。それは奇妙なもの、解らないものそのものである。それは何かを《提示しうる》異質性である。それはどんな神よりも遠い異質性 (見知らぬ奇妙なもの) である。従つてハイデガーの存在 (Sein) とは全く別のものである。レヴィナスによればハイデガーの存在 (Sein) は「世界の明るさそのもの、場所、風景、平和」であるが、ブランシヨの小説は、「世界から絶対的な距離を持つてゐること (un éloignement absolu du Monde)」「存在論的カテゴリーの逆転 (un renversement des catégories ontologiques)」を暗示する。つまり現実の世界から無限の距離を持ち、存在論的カテゴリーを覆えず、換言すれば存在論の及ばないものである。それは、レヴィナスによれば「(認識の) 限界の彼方に、ある非・場所に、思惟することの出来ない何か、思惟の扉をたたかない何ものが位置づけられる

(Au-delà de cette limite, se situerait, en un non-lieu, quelque chose qui ne saurait être pensé et qui me frappe pas à la porte de la pensée⁽³⁾。)つまり、認識の彼方に、非・場所、即ち時間と関わるものがないところで、我々の思惟を越え、思惟には関わりを持たうとしない何ものかが現われてくる、というのである。そしてレヴィナスはその何ものかを「エクリチュール（書かれたもの）は消そうとする——それは言葉の冒険である⁽¹⁴⁾」と言う。この「消すこと」、「削除」についてのレヴィナスの表現は興味深いのでまずフランス語を記したい。

La littérature tout entière s'évertuerait à raturer sa signification en raturant les ratures et les ratures des ratures. Et coetera... A l'infini... Position contre nature de l'écrivain, rétro-activité⁽¹⁵⁾ interminable de celui qui efface ses traces et les traces que laisse l'effacement des traces.

「およそ文学とは削除を削り取る、そして削除の削除を削り取ることによって、その意味作用を削除する勇気をふるい起こすのである。そして抑えて…無限に…これは作家の本性に反した立場である。つまり自分の軌跡と、その軌跡が消えるままになっている軌跡を消すという果てしない遡る活動である。」

この文章の前半で *raturer, ratures* の語が多用されていることに驚かずにはいられない。*raturer* は「削り取る」、削除する、の意であり、*ratures* は「削り取ること」、「削除」、「抹殺」の意である。従ってこの文章の意味は「文学は削除、それも削除を繰り返えし、消し失ってしまうことによって成り立つ」ということである。つまりレヴィナスによると、ブランショの場合、文学者は何かを措定的に立てるのではなく、痕跡や軌跡を消していこうとする遡る活動である、ということになる。それは何に遡るのか。それは自己の源へ、根源へと遡ることである。

レヴィナスはダルマスとの対話の最後にモーリス・ブランショの作品と思惟が持つ二つの方向を解釈する。それら

はつまり(一)「それは意味の喪失の告知とディスクールの散乱の告知である (c'est l'annonce d'une perte de sens, d'une dissémination du discours)」といわれるように文学の言語がその意味を喪失することである。そこでは「虚無 (le néant) そのものもはや静かに思惟され得ないで、虚無はそれに聴き入る耳のためのみに多義的に捉えられ⁽¹⁶⁾る。」つまり言葉の意味が削除され、繰り返えし剝奪されて、遂に我々は「中性 (Neutre)」の非人間的なもの、恐るべきものに委ねられる。(二)全体性 (totalité)、つまりこの世界の全体性を否定するものがブランシヨにはあることである。つまり一貫性のあるディスクールとは別のディスクールの提示がされる。一貫性のあるディスクールは、この別のディスクールを捉えることも黙然することも出来ない。別のディスクールは間断なき雑音に散らされ、差異性が同一性による世界支配を妨げて、存在と非存在の間の弁証法によって秩序づけることを破っている。この全体性を被るもの、差異性を提示するのが「中性」である。

レヴィナスは結局「中性」について次のように語る。「この中性は何者かでも何かでさえもない。それは排除された《第三者》でしかない。かかる第三者は存在させない。(Ce Neutre n'est pas quelque un ni même un quelque chose. Ce n'est qu'un tiers exclu qui n'est même pas.) しかしそこにはどんな背後世界も決して開かなかった超越がより多くある⁽¹⁷⁾。」と。つまり「中性」とは「排除された《第三者(項)》」であり、ニーチェの背後世界——キリスト教的世界観——が開き得なかった超越 (transcendence) の場、トボスである。しかし「場・トボス」と言っても空間・時間の概念ではない。それは存在論的に存在しないのである。

レヴィナスによれば、文学にブランシヨが与えた意味は、「それ自身の絶体絶命まで (Jusqu'à son propre échec)⁽¹⁸⁾」語り得ることであり、「ロゴス (言語文章) の中に集結したものの散乱 (dissémination de ce qui rassemblait en logos)」を開示することにある。それは文学の異常さ (l'extra-ordinaire, 普通の外にあること) であるが、レヴィナスはこれを「存在でもなく非存在でもない (ni être, ni non-être)」と語り、かかる異常性を「自己」に課すること

なく「自己」に課す (s'imposer sans s'imposer) とする。そしてボードレールの術語では、中性 (Neutre)、『野蠻 (Sauvage)』、『異質 (Étranger, 異邦人)』、『秩序の否定 (Négation de l'Ordre)』、『数と存在の出口 (Sortie des Nombres et de Etres)』である、とレヴィナスは考える⁽²⁰⁾。しかしレヴィナスは次のような言葉をつけ加える。「しかし絶え間のない騒ぎ (remue-ménage)』、『中断することなく、全ゆる音響の彼方で響いている沈黙 (silence qui résonne sans interruption possible, au-delà de toute sonorité)』と⁽²¹⁾。とついでこの「中断することなく、全ゆる音響の彼方で響いている沈黙」とは何か。

不在の現前

「『他なるもの』であり続けるものの開示の様態は、それが現われているにも拘らず、思惟 (la pensée) ではなく、詩のランガージュ (le langage du poème) である。詩のランガージュの特権は、ブランショの分析によれば、知よりずっと遠くに我々を導くことにあるのではない。それはテレパシー (遠くのものとのパトスを共にすること) のようなものではない。外にあるもの (l'extérieur) は遠くにあるのではない。それは現われる——しかし独一な仕方——全ゆる現実的なものが否定された時、つまりこの非現実の現実 (réalisation de irréalité) が現われる⁽²²⁾」つまり、『他なるもの (autre)』の現われるのは思惟という形ではなく、詩のランガージュという形で現われる。『他なるもの』が外にあるという場合、それは距離的なものを考察する「遠い」という尺度が妥当する意味ではない。『他なるもの』はすべての現実が否定された時、「非現実の現実」として現われる。かかる現われは、世界の内部の孤独やあきらめの感情とは何の共通性もなく、ただ「世界の中に自己」を構築することが不可能な不可能性の荒涼とした領域での孤独⁽²³⁾である。文学とは結局その「世界とは共通性のない不可能性の荒涼とした領域での孤独を目指すの

であろう。特に今日ではレヴィナスによれば、文学は「最も根源的に非・世界であるもの、存在者の存在——その消滅の現前そのものであることを語らせしめて自⁽²⁴⁾」完成させる (elle (la littérature) laisse parler et s'accomplir ce qui est le plus radicalement non-monde, l'être de l'étant — la présence même de sa disparition)」即ち文学は最も根源的に非・世界であるもの、つまり存在者の存在の消滅の現前を自ら語らしめることである。そしてレヴィナスは次のように言う。「書くことは、語の中で事物を離し、そして存在に反響させることにある、本質的ランガーシュに還帰することであろう。諸事物の存在は作品の中で命名されることはない。しかし作品の中で自ら語り、語である事物、の不在と一致する。存在することは語ることと同じである、しかしいかなる対話者も不在である状態で語るのである。非人称の語ることは、《汝》なしで、詰問なしで、呼格なしで語ることである。しかし普遍的な大いなる理性を表わす《一貫性のあるディスクールとは区別した語ることである。ディスクールと大いなる理性は昼の秩序に属するのである。すべての作品は、作者があたかも無名の秩序に奉仕するかのようになればそれだけですます完全に作品になる。カフカが《私》の代りに《⁽²⁵⁾》(非人称の⁽²⁶⁾)》を置き換えた時に、彼は真に書き始めたのである。なぜならば《作家は誰も語らないひとつのランガーシュに属しているからである。その時決して普遍的で永遠的な理想が書くこと(エクリチュール)を命ずるのではない⁽²⁵⁾》と。この箇所は大変重要なので次に原文を掲げる。

Écrire, serait revenir au langage essentiel qui consiste à écarter les choses dans les mots et à faire écho à l'être. L'être des choses n'est pas nommé dans l'œuvre, mais se dit dans l'œuvre, coïncide avec l'absence des choses que sont les mots. Être, équivalait à parler, mais parler en absence de tout interlocuteur. Parler impersonnel, sans «toi», sans interpellation, sans vocatif et cependant distinct du «discours cohérent» manifestant une Raison universelle, discours et Raison appartenant

à l'ordre du jour. Toute oeuvre est d'autant plus parfaitement oeuvre que son auteur ne compte pas comme s'il servait un ordre anonyme. Kafka a commencé à écrire véritablement quand il a substitué *(il)* à *(je)*, car l'écrivain appartient à un langage que personne ne parle. Non pas qu'un idéal universel et éternel commande alors l'écriture.

即ち「書くこと」(écrire)とは本質的言語に戻る(帰還することである。本質的言語は語(mot)に於いて事物(chose)を離す、遠ざけて存在と響き合うようにする。つまり、語から事物を取り出して存在と対応させるのである。すると事物の存在は作品に於いて命名されるのではなく、作品に於いて語られる。命名されるとは名が付けられたり呼ばれたりすることでそれでは語に戻ってしまう。存在は語られなくてはならない。従って事物の存在は、語である事物、の不在と一致する。つまり事物の存在は、語と事物が対応している。この状態の不在である。存在すること(être)は語ること(parler)である。しかし命名された名前としての語と事物の対応がないから、この語ることは全ゆる対話者を欠いている。対話者の欠如は、レヴィナスによれば、《汝》なし、詰問つまり問われる相手なしの、呼びかけとしての呼格なしの「語ること」である。それは人間的な関わりなしの「語り」であるから、impersonnel つまり非人称にならざるを得ない。この「語り」はヘーゲルの普遍的理性の自己展開を貫く、「一貫したディスクール」とは明確に異なる。かかるディスクールや普遍的理性は屋の秩序に属するのであるから非人称の「語り」はディスクールの散乱(dissémination)を結果として引き起こす。従ってここにレヴィナスの主張が出て来る、つまり、「無名の秩序に作者が奉仕するように考えた時、それに応じて作品は完全に作品となる」という主張である。作者は作家としての自己を名前のない、無名の秩序にあずけるのである。カフカが真の意味で書き始めたのは、(écrire)を始めたのは、彼が《私(我)》の代わりに《非人称の二》を置き換えた時である。我々はレヴィ

ナスの議論のひとつ、ハイデガーの *es gibt* に対する *ニヤ* 論を思い起こす必要があろう。⁽²⁶⁾ *ニヤ* の *ニ* は非人性の *ニ* で中性であった。そしてレヴィナスは、フランシヨの文章「作家は誰も知らないひとつのランガージュに属している (*l'écrivain appartient à un langage que personne ne parle.*)」を引く。フランス語で見る限りこの否定を含む *personne* の語は極めて重要である。つまり人格的な者が語らない *ある* (ひとつの) ランガージュ (言語) がある、ということである。そしてレヴィナスはすぐその後で、「普遍的且つ永遠的理想がその時書くこと (*écriture* 書かれたもの) を命ずるのではない」と続ける。あるランガージュは書かれたものとなるが、その時普遍的且つ永遠的理想がそれを命ずるのではない。言うまでもないことであるが、この *ある* ランガージュとは「本質的言語」のことである。ここで少くとも我々はレヴィナスの言語論の一端を見ることが出来る。つまり、事物 (*choses*) は語 (*mot*) と命名性、即ち命名すること (*nommer*) を介して結びつく。語はディスクールを形成する。かかるディスクールは対話者としての《汝》呼格を必要とする。これは理想、大いなる普遍的理性 (*Raison*) が関わる昼の「一貫性のあるディスクール」である。これに対して《無名のディスクール》、本質的言語がある。書くこと (*écrire*) とは事物の存在が、語ることである。つまり存在と語ることが一つになっている。それは《汝》や呼格のない、対話者を欠いた「語ること」である。それは非人称の *ニ* の「語り」である。その時作家は《我》ではなく、無名の秩序に奉仕する者となる。

沈黙

「フランシヨは作品の非人称性は、神々が出立した後の、ざわめきのように消すことの出来ない、沈黙の非人称であることを示している。」⁽²⁷⁾とレヴィナスは語る。それは「時の非人称性」と「夜の非人称性」とも言える。ではその

原作者はどうなるのか。「創造者はその名が消え、その記憶が消える者である。《創造者は自分の作品に対してかかる力もない。》(Le créateur est sans pouvoir sur son œuvre.)」書くこと、それはバロールを自己自身に結びつけている絆を断ち切ること、私をある汝に対して語りかけさせている関係を逆転させること、である。——つまり《語ることを止められないものの反響に自づなること (se faire écho de ce qui ne peut cesser de parler)》である⁽²⁸⁾」ブランシヨの論ずる創造者としての作者は、その名や固有の記憶が消えて、語るものの反響(echo)となることである。それは作家の主体性が消えて受動性のみになることである。

レヴィナスは語る。「ブランシヨは死に近づいている。書くこと、それは死ぬことである(Ecrire, c'est mourir.)。ブランシヨにとって死は人間的な究極の可能性の悲壮性でも、不可能性の可能性でもなく、捉えられ得ないものの断え間のない繰り返えしであり、その前で《我》はその自体性(institué)を失うものである。可能性の不可能性(Impossibilité de la possibilité)。文学作品は我々を死に近づける。なぜならば、死は、作品がさざめかしている存在の終ることのないざわめきであるからである。」そして更に「死、それは終りではない。それは終わることを終えることが出来ないことである。(La mort, ce n'est pas la fin, c'est le n'en pas finir de finir)」と語る⁽²⁹⁾。

レヴィナスは、「芸術の本質は、言語から自己を語る語り得ないものと通ること、作品によって基礎的なもの不明瞭性を見えるようにすることにある (L'essence de l'art consisterait à passer du langage à l'indiscible qui se dit, à rendre visible par l'œuvre l'obscurité de l'élémental)」と考える⁽³¹⁾。そして彼は、「文学はいかなる思惟も接近することの出来ない岸に我々を投げ出す。——文学は思惟不可能なものに通じている。…文学は世界の全ての地平を跨ぐる超越性の独一な冒険である。」と語る⁽³¹⁾。つまり文学は世界を超越した思惟不可能なものに通じている超越性の冒険性を持っている。そしてブランシヨは、この思惟不可能なものを存在(être)と呼んだ。一方ハイデガー

は周知のように『芸術作品の始まり』の中で、芸術はアレテー (ἀρετή) つまり《存在の真理》を明らかにすると語った。レヴィナスによれば、ブランショにとって書くことは《存在の真理》に到達するのではなく、それは「存在の誤りへ——彷徨の場としての存在へ、住むことの出来ないところへ (à l'erreur de l'être — à l'être comme lieu d'errance, à l'inhabitable)⁽³³⁾」導くのである。ブランショの場合、削除を介してある種の不明瞭性 (obscurité) が明らかになるのである。つまり「それについてどんな把握も可能でないような絶対的に外的な不明瞭性 (obscurité absolument extérieure sur laquelle aucune prise n'est possible)⁽³⁴⁾」である。それは、「黒い光、下方より来る夜、世界を破壊し、世界をその起源に、繰り返した、つぶやきに、絶え間なく押しよせるざわめきに、《深い昔に、決して十分でない昔》にと導く光である」⁽³⁵⁾と語られる。これは現実性の最も深遠なる、非現実そのものである。

註

- (1) Emmanuel Levinas: *Sur Maurice Blanchot*, Fata Morgana, Paris, 1975, p. 9. 内田樹訳『モーリス・ブランショ』国文社、一九九二年。本文の訳は全て著者のものによる。
- (2) *Ibid.*, p. 10.
- (3) *Ibid.*, p. 48.
- (4) *Ibid.*, p. 48.
- (5) *Ibid.*, p. 48.
- (6) *Ibid.*, p. 48.
- (7) *Ibid.*, p. 48.
- (8) *Ibid.*, p. 48.
- (9) Maurice Blanchot: *Reflection on Nihilism: Crossing of the Line*. *The New Nietzsche: Contemporary Styles of Interpretation*, ed by David B. Allison, Delta, 1977, p. 41.

- (10) Levinas: *Sur Maurice Blanchot*, p. 41.
- (11) cf. *Ibid.*, p. 45~47.
- (12) *Ibid.*, p. 49.
- (13) *Ibid.*, p. 50.
- (14) *Ibid.*, p. 50.
- (15) *Ibid.*, p. 50.
- (16) *Ibid.*, p. 51.
- (17) *Ibid.*, p. 52.
- (18) *Ibid.*, p. 46.
- (19) *Ibid.*, p. 47.
- (20) *Ibid.*, p. 47.
- (21) *Ibid.*, p. 47.
- (22) *Ibid.*, p. 14.
- (23) *Ibid.*, p. 15.
- (24) *Ibid.*, p. 15.
- (25) *Ibid.*, p. 15.
- (26) 拙論「存在と意識」青山学院女子短期大学紀要、四十一輯、昭和十二年十一月一二〇頁参照。
- (27) *Ibid.*, p. 15.
- (28) *Ibid.*, p. 15-16.
- (29) *Ibid.*, p. 16.
- (30) *Ibid.*, p. 16.
- (31) *Ibid.*, p. 18.
- (32) *Ibid.*, p. 18.
- (33) *Ibid.*, p. 19.

- (34) Ibid., p. 22.
(35) Ibid., p. 23.